

菟菟本

泉鏡花

青空文庫

如月きさらぎのはじめから三月の末へかけて、まだしつとりと春雨にならぬ間を、毎日のように風が続いた。北も南も吹荒ふきすさんで、戸障子を煽あおつ、柱を揺ゆぶる、屋根を鳴らす、物干ものほし棹ざおを刎はね飛ばす——荒磯あらいそや、奥山家、都会離れた国々では、もつとも熊を射た、鯨を突いた、祟たりの吹雪に戸を鎖さして、冬籠ふゆもる頃ながら——東京もまた砂埃ほこりたかの戦を避けて、家ごと穴籠りする思い。

意気な小家こいえに流連いっつけの朝の手水ちようずにも、砂利を含んで、じりりとする。

羽目も天井も乾いて燥はしやいで、煤すすの引火奴ほくちに礫つぶてが飛ぶと、そのままチリチリと火の粉になつて燃出しそうな物騒さわさ。下町、山の手、昼夜の火沙汰ひぎたで、時の鐘ほどジャンジャンと打ぶつける、そこもかしこも、放火つけびだ放火だ、と取り騒いで、夜廻りの拍子木が、枕に響く町々に、寝心のさて安からざりし年とかや。

三月の中の七日、珍しく朝風あさなぎして、そのまま穩おだやかに一日暮れて……空はどんよりと曇つたが、底に雨氣あまげを持ったのさえ、頃このごろ日の埃には、もの和やわらかに視ながめられる……じとじと

とした雲一面、星はなけれど宵月の、おぼろおぼろ 朧々の大路小路。辻には長唄の流しも聞えた。

この七の日は、番町のおおいちよう大銀杏とともに名高い、二七の不動尊の縁日で、月六齋。かしらの二日は大粒の雨が、ちようど夜店の出盛る頃に、ばらばらなまあつたか生暖い風に吹きつけたために——その癖すぐに晴れたけれども——丸潰れとなつた。……以来、打続いた風ツ吹きで、銀杏の梢もこすえ おおわらわ大童に乱れて蓬々おどろおどろしかつた、その今夜は、霞に夕化粧で薄あかりにすらりと立つ。

堂とは一町ばかり間あわいをおいた、この樹の許から、桜草、堇、山吹、植木屋の路みちを開き初めて、長閑のどかに春めく蝶々簪、娘たちの宵出よいでの姿。酸漿屋の店から灯ともが点れて、絵草紙屋、小間物店の、夜の錦にしきに、紅を織り込む賑にぎわいとなつた。

が、引続いた火沙汰のために、何となく、心々のあわただしき、見附の火の見櫓やぐらが遠とほ霞すみで露店の灯の映るのも、花の使つかいと視ながめあえず、遠火あぶで焙らるる思いがしよう、九時と
いふのに屋敷町の塀に人が消えて、御堂みどうの前も寂ひっそり寞としたのである。

提灯ちようちんもやがて消えた。

ひたひたと木の葉から滴る音して、汲くみかえし、掬むすびかえた、柄杓ひしゃくの柄を漏る雫しずくが聞える。その暗くなつた手水鉢うしろの背後に、古井戸が一つある。……番町で古井戸と言うと、び

しよ濡れで血だらけの婦が、皿を持って出そうだけれども、別に仔細はない。……参詣の散った夜更には、人目を避けて、素膚に水垢離を取るのが時々あるから、と思うとあるいはそれかも知れぬ。

今境内は人氣勢もせぬ時、その井戸の片隅、分けても暗い中に、あたかも水から引上げられた体に、しよんぼり立つた影法師が、本堂の正面に二三本燃え残った蠟燭の、横曇りした、七星の数の切れたように、たよらない明に幽に映った。

びしやびしや……水だらけの湿っぽい井戸端を、草履か、跣足か、沈んで踏んで、陰氣に手水鉢の柱に縫つて、そこで息を吐く、肩を一つ揺つたが、敷石の上へ、踰々々々。

口を開いて、唇赤く、パツと蠟の火を吸つた形の、正面の鰐口の下へ、髯のもじやもじやと生えた蒼い顔を出したのは、頬のこけた男であつた。

内へ引く、勢の無い咳をすると、眉を顰めたが、窪んだ目で、御堂の裡を俯向いて、覗いて、

「お蠟を。」

そう云つて、綻びて、袂の尖でやつと繋がる、ぐたりと下へ襲ねた、どくどく重そうなしろがすり白緋の浴衣の溢出す、汚れて萎えた綿入のだらけた袖口へ、右の手を、手首を曲げて、肩を落して突込んだのは、賽銭を探つたらしい。

が、チャリリともせぬ。

時に、本堂へむくりと立つた、大きな頭の真黒なのが、海坊主のように映つて、上から三宝へ伸懸ると、手が燈明に映つて、新しい蠟燭を取ろうとする。

一ツ狭い間を措いた、障子の裡には、燈があかあかとして、二三人居残つた講中らしい影が映したが、御本尊の前にはこの雇和尚ただ一人。もう腰衣ばかり袈裟もはずして、早やお扉を閉める処。この、しよびたれた参詣人が、びしよびしよと賽銭箱の前へ立つた時は、ばたり、ばたりと、団扇にしては物寂しい、大な蛾の音を立てて、沖の暗夜の不知火が、ひらひらと縦に燃える残んの灯を、広い掌で煽ぎ煽ぎ、二三挺順に消していたのである。

「ええ、」

とその男が圧えて、低い声で継るように言った。

「済みませんがね、もし、私持合せがございませぬ。ええ、新しいお蠟燭は御遠慮を申上げます。ええ。」

「はあ。」と云う、和尚が声の幅を押被せるばかり。鼻も大きければ、口も大きい、額の黒子も大入道、眉をもじやもじやと動かして聞返す。

これがために、寔れた男は言洩つて、

「で、ございますから、どうぞ蠟燭はお点し下さいませぬように。」

「さようか。」

と、も一つ押被せたが、そのまま、遣放しにも出来ないのは、彼がまだ何か言いたそうに、もじもじとしたからで。

和尚はまじりと見ていたが、果しがないから、大な耳を引傾げざまに、卜掌を当てて、燈明の前へ、その黒子を明らさまに出した体は、耳が遠いからという仕方に似たが、この際、判然分るように物を言え、と催促をしたのである。

「ええ。」

とまた云う、男は口を利くのも呼吸だわしそうに肩を揺る、……

「就きましたは、真に申兼ねましたが、その蠟燭でございます。」

「蠟燭は分つたであります。」

小鼻に皺しわを寄せて、黒子に網の目の筋を刻み、

「御都合じゃからお蠟は上げぬようにと言うのじゃ。御随意であります。何か、代物を所持なさらんで、一挺、お蠟が借りたいとでも言われる事か、それも御随意であります。じゃが、もう時分も遅いでな。」

「いいえ、」

「はい、」と、もどかしそうな鼻息を吹く。

「何でございます、その、さような次第ではございません。それでございますから、申しにくいのでございますが、思おぼしめし召めいを持ちまして、お蠟を一挺、お貸し下さる事にはなりませんまいでございましょうか。」

「じゃから、じゃから御随意であります。じゃが時刻も遅いでな、……見なさる通り、燈明をしめしておるが、それともに点つけるのですか。」

「それがでございます。」

と疲れた状さまにぐたりと賽銭箱の縁へりに両手を支ついて、両の耳に、すすくと毛のかぶさつた、小さな頭をがっくりと下げながら、

「一挺お貸し下さいまし、……と申しますのが、御神前に備えるではございません。私、てまえ頂いて帰りたいのでございます。」

「お蠟を持って行くのですか。ふうむ、」と大く鼻を鳴す。おおきなら

「それも、一度お供えになりました、燃えさしが願いたいののでございまして。」

いや、時節がら物騒千万。

三

「待て、待て、ちよつと……」

往来留どめの提ちようちん灯はもう消したが、一筋、両側の家の戸を鎖さした、寂さみしい町の真中まんなかに、六道の辻みちの通みちしるべに、鬼が植えた鉄棒かなぼうのごとく標しるしの残った、縁日果てた番町通どおり。なだれに帯板へ下りようとすする角の処で、頬ほおかぶり被かした半纏はんてんぎ着が一人、右側の廂ひさしが下った小家の軒下暗い中から、ひたひたと草履ぞうりで出た。

声も立てず往来留どめのその杵くに並んで、ひしと足を留めたのは、あの、古井戸の陰から、よろりと出て、和尚に蠟燭の燃えさしをねだった、なぜ、その手水鉢の柄杓を盗まなかつ

たろうと思う、ふなゆうれい船幽霊のような、蒼あおしよびれた男である。

半纏着は、肩を斜はすつかいに、つかつかと寄つて、

「待てつたら、待て。」とドス声を洩るかすめて、一つしやくつて、頬被りから突出すあご頤に凄味すしみを見せた。が、一向に張合なし……対手あいては待てと云われたまま、破れた暖簾のれんに、ソヨとの風も無いように、ぶら下つた体ていに立停たちどまつて待つのであるから。

「どこへ行く、」

黙つて、じろりと顔を見る。

「どこへ行くかい。」

「ええ、宅へ帰りますでございます。」

「家はどこだ。」

「市ヶ谷田町でございます。」

「名は何てんだ、……」

と調子を低めて、ずっと摺寄すりより、

「こう言うとな、大概生意気な奴やつは、名を聞くんなら、自分から名告なのれと、手数を掛けるのがお極きまりだ。……俺はな、お前めえの名を聞いても、自分で名告るには及まばない身分のもの

だ、可いか。その筋の刑事だ。分ったか。」

「ええ、旦那でいらつしやいますか。」

と、破れ布子ぬのこの上から見ても骨の触つて痛そうな、痩やせた胸に、ぎしと組んだ手を解いて叩頭おしぎをして、

「御苦労様でございます。」

「むむ、御苦労様か。……だがな、余計な事を言わんでも可い。名を言わんかい。何てんだ、と聞いているんじゃないか。」

「進藤延のぶかず一と申します。」

「何だ、進藤延一、へい、変に学問をしたような、ハイカラな名じやねえか。」

と言葉じりもしどろになって、頤あごを引込めたと思うと、おかしく悄気しよげたも道理こそ。刑事おとと威おとした半纏着は、その実町内の若いもの、下塗したぬりの欣きん八はちと云う。これはまた学問をしなそうな兄哥あにいが、二七講の景氣づけに、縁日の夜は縁起を祝つて、御堂一室ひとまど処で、三宝を据えて、頼母子たのもしを営む、……世話方で居残ると……お燈明とんみの消々きえきえ時、フト魔まが魅さしたような、髪蓬おとしろに、骨幹あらわなりとあるのが、鰐わに口くちの下に立たち頭あらかわれ、ものにも事を欠いた、断ことわるにもちよつと口実の見当らない、蠟燭の燃えさしを授けてもらつて、消えるがごとく

門を出たのを、ト伸上つて見ていた奴。

「棄ててはおかれませんよ、串戯じょうだんじゃねえ。あの、魔ものめ。ご本尊にあやかつて、めらめらと背中に火を背負しよつて帰つたのが見えませんか。以来、下町は火事だ。僥倖しあわせと、山の手は静かだつて。中やすみの風が變つて、火先が井戸端から舐なめはじめた、てつきり放火つけびの正体だ。見逃してやったが最後、直ぐに番町は黒焦くろこげさね。私が一番生捕いけどつて、御覽じろ、火事の卵を硝子ビイドロの中へ泳がせて、追付おっつけ金魚の看板をお目に懸ける。……」

「講親こうおやが、

「欣八、抜かるな。」

「合点だ。」

四

「ああ、旨うまいな。」

煙草たばこの煙を、すばすばと吹く。溝石の上に腰を落して、打坐ぶつすわりそうに蹲しゃがみながら、銜くわ

えた煙管きせるの吸口が、カチカチと齒に当って、歪ゆがみなりの帽子がふらふらとなる。……

夜は更けたが、寒さに震えるのではない、骨まで、ぐなぐなに酔よっているの、ともすると倒のめりそうになるのを、路傍みちばたの電信柱の根に絶すがつて、片手喫ふかしに立続ける。

「旦那、大分いけますねえ。」

膝掛ひざかけを引抱ひんだいて、せめてそれにも暖あたりたそうな車夫は、値きが極まつてこれから乗ろうとする酔よつぱらい客きやくが、ちよつと一服で、提灯ちようちんの灯で吸うのを待つ間ま、氷のごとく堅かくなつて、催促がましく脚と脚を、霜柱しもむちに摺すり合せた。

「何？大分いけますね……とおいでなさると、お酌しやくが附ついて飲んでるようだが、酒はもう沢山だ。この上は女さね。ええ、どうだい、生酔なまよ本性たが違ちがわずで、間違まちがいの無い事を言うだろう。」

「何ならお供をいたしましょう、ええ、旦那。」

「お供だ？ どこへ。」

「お馴染なじみ様でございませあね。」

「馬鹿ばかにするない、見附みつきで外濠そとぼりへ乗替かえようというのを、ぐつすり寐ね込んでいて、真直まっすぐに運はられてよ、閻魔えんまだ、と怒鳴いかられて驚おどいて飛出としたんだ。お供もないもんだ。ここを

どこだと思ってる。

電車が無いから、御意の通り、高い車賃を、恐入って乗ろうというんだ。家数四五軒も転がして、はい、さようならば阿漕だろう。」

口を曲げて、看板の灯で苦笑して、

「まず、……極めつけたものよ。当人こう見えて、その実方角が分りません。一体、右側か左側か。」と、とろりとして星を仰ぐ。

「大木戸から向って左側でございます、へい。」

「さては電車路を突切ったな。そのまま引返せば可いものを、何の気で渡った知らん。」と真になつて打傾く。

「車夫、車夫ツて、私をお呼びなさりながら、横なぐれにおいでなさいました。」

「……夢中だ。よっぽどまいったらしい。素敵に長い、ぐらぐらする橋を渡るんだと思つたつけ。ああ、酔った。しかし可い心持だ。」とぐつたり俯向く。

「旦那、旦那、さあ、もう召して下さい、……串戯じゃない。」

と半分呟いて、石に置いた看板を、ト乗掛つて、ひよいと取る。

鼻の前を、その燈が、暗がりにスーツと上ると、ハツ嚏、酔漢は、細い箍の嵌つた、

どんより黄色な魂を、口から拔出されたように、ぽかんと仰向けに目を明けた。

「ああ、待ったり。」

「燃えます、旦那、提灯を乱暴しちや不可ません。」

「貸しなよ、もう一服吸附けるんだ。」

「燐寸を上げまさあね。」

「味が違います……酔覚めの煙草は蝋燭の火で喫むと極ったもんだ。……だが……心意気があるなら、鼻紙を引裂いて、行燈の火を燃して取って、長羅宇でつけてくれるか。」
と中腰に立って、煙管を突込む、雁首が、ぼつと大きく映ったが、吸取るように、ぼつたりと紙になる。

「消した、お前さん。」

内証で舌打。

霜夜に芬と香が立って、薄い煙が濛と立つ。

「車夫。」

「何ですえ。」

「……宿に、桔梗屋と云うのがあるかい、——どこだね。」

「ですから、お供を願いたいんで、へい、直きそこだつて旦那、御冥加だ。御祝儀と思召して一つ暖まらしておくんなさいまし、寒くつて遣切れませんや。」とわざとらしく、がちがち。

「雲助め。」

と笑いながら、

「市ヶ谷まで雇つたんだ、賃銭は遣るよ、……車は要らない。そのかわり、蠟燭の燃えさを貰つて行く。……」

五

さて酔漢よっぱらいは、山鳥の巢ねに騒見ぞめく、梟ふくろうという形で、も一度線路を渡越わたりこした、宿の中しゆくほどを格子摺こうしずれに伸しながら、染色そめいろも同じ、桔梗屋ききやうと描かいて、風情は過ぎた、月明りの裏打をしたように、横店の電燈でんきが映る、暖簾のれんをさらりと、肩で分けた。よしこことても武蔵野の草に花咲く名所とて、廂ひさしの霜も薄化粧、夜半よわの凄すこさも狐火きつねびに溶けて、情なさけの露つゆとなりやせん。

「若い衆、」

「らっしやいー!」

「遊ぶぜ。」

「難^{ありがと}有う様で、へい、」と前掛^{まえかけ}の腰^{かが}を屈^{かが}める、揉手^{もみで}の肱^{ひじ}に、ピンと芻^はねた、博多帯^{はかたおび}の結^{むすびめ}目は、赤坂奴^{やっこひげ}の髻^{ひげ}と見た。

「振らないのを頼みます。雨具を持たないお客だよ。」

「ちやんとな、」

と唐棧^{とうげん}の胸^{むね}を劃^{しき}って、

「胸三寸。……へへへ、お古い処、お馴染^{なじみがいい}効^いでございます、へへへ、お上^あんなはるよ。」
帳場^{ちやうば}から、

「お客様^{おきゃくさま}ア。」

まんざらでない登音^{あしおと}で、トントンと踏む梯子^{はしごだん}段^{だん}。

「いらっしやい。」と……水^{みづ}へ投^なげて海津^{かいづ}を掬^{しやく}う、澆^{はつらつ}刺^さとした声^{こゑ}なら可^いいが、海綿^{かいめん}に染^ぞむ泡波^{あぶく}のごとく、投^なげた歯^はに舌^{しつ}のねばり、どろんとした調子^{てうし}を上げた、遣手^{やりて}部屋^{べや}のお媼^{おば}さんというのが、茶渋^{ちやしぶ}に蕎麦切^{そばきり}を擲^{から}ませた、遣放^{やりつぱな}しな立膝^{たちひざ}で、お下^{くだ}りを這^{しよび}曳^ひいたらしい、さ

めた鯺鮓を、くじやくじやと啜る処——

横手の衝立が稲塚で、火鉢の茶釜は竹の子笠、と見ると暖麵蚯蚓のごとし。惟れば嘴の尖つた白面の狐が、古蓑を襦襦で、尻尾の褌を取つて顛れそう。

時しも颯と夜嵐して、家中穴だらけの障子の紙が、はらはらと鳴る、霰の音。

勢辟易せざるを得ずで、客人ぎよつとした体で、足が窘んで、そのまま欄干に凭懸ると、一小間抜けたのが、おもしに打たれて、ぐらぐらと震動に及ぶ。

「わあ、助けてくれ。」

「お前さん、可い御機嫌で。」

とニヤリと口を開けた、お媼さんの齒の黄色さ。横に小楊枝を使うのが、つぶつぶと入る。

若い衆飛んで来て、腰を極めて、爪先で、つつい、

「ちよつと、こちらへ。」

と古畳八畳敷、狸を想う真中へ、性の抜けた、べろべろの赤毛氈。四角でもなし、円でもなし、真鍮の獅嚙火鉢は、古寺の書院めいて、何と、灰に刺したは杉の割箸。こいつを杖という体で、客は、箸を割つて、肱を張り、擬勢を示して大胡坐にとな

る。

「ええ。」

と早口の尻上りで、若いものは敷居際に、梯子段見通しの中腰。

「お馴染様は、何方様で……へへへ、つい、お見外れ申しましてございまして、へい。」

「馴染はないよ。」

「御申戯を。」

「まっただ。」

「では、その、へへへ、」

「何が可笑しい。」

「いえ、その、お古い処を……お馴染効でございまして、ちよつとお見立てなさいまし。」

彼は胸を張って顔を上げた。

「そいつは嫌いだ。」

「もし、野暮なようだが、またお慰み。日比谷で見合と申すのではございけません。」

「飛んだ見違えだぜ、気取るものか。一ツ大野暮に我輩、此家のおいらんに望みがある。」

「お名ざしで？」

「悪いか。」

「結構ですとも、お古い処を、お馴染効でございまして。……」

六

「あいかた 對方は白露と極つた……桔梗屋の白露、お職だと言う。……遣手部屋の蚯蚓を思えば、そもさん 仕か、狐塚の女郎花。」

で、この名ざしをするのに、客は妙な事を言った。

「若い衆、注文というのは、お照しだよ。」

「へい、」

「内に、居るだろう。」

「お照しが居りますえ？」

と解せない顔色。

「そりや、無いことはございせんが、」

「秘すな、尋常に頭せろ。」と真赤な目で睨んで言った。

「何も秘します事はございません、ですが御覧の通り、当場所も疾の以前から、かように電燈になりました。……ひきつけの遊君にお見違えはございません。別して、貴客様
 など、お目が高くつていらつしやいます、へい、えッへへへ。もつとも、その、ちとあ
 ちらへ、となりまして、お望みとありますれば、」

「だから、望みだから、お照しを出せよ。」

「それは、お照しなり、行燈なり、いかようともいたしますんで、とにかく、……夜も
 更けております事、遊君の処を、お早く、どうぞ。」

と、ちらりと遣手部屋へ目を遣つて、此奴、お荷物だ、と仕方で見せた。

「分らないな。」

と煙管を突込んで、ばつたり置くと、赤毛氈に、ぶくぶくして、擬印伝の煙草入は古
 池を泳ぐ体なり。

「女は蠟燭だと云つてるんだ。」

お媪さんが突掛け草履で、片手を懐に、小楊枝を襟先へ揉挿しながら、いけぞんざいに
 炭取を跨いで出て、敷居越に立ったなり、汚点のある額越しに、じろりと視て、

「遊君が綺麗で柔順しくつて持てさいすりや言種はないんじゃないか。遅いや、ね、

お前さん。」

と一ツ叱つて、客が這奴言おうで擡げた頭を、しゃくつた頤で、無言で圧着けて、
「お勝どん、」と空を呼ぶ。

「へーい。」

途端に、がらがらと鼠が騒いだ。……天井裏で声がして、十五六の当の婢は、どこから
頭れたか、煤を繫いで、その天井から振下げたように、二階の廊下を、およそ眠いといっ
た仏頂面で、ちよろりと来た。

「白露さん、……お初会だよ。」

「へーい。」

夢が裏返つたごとく、くるりと向うむきになつて、またちよろり。

「旦那こちらへ、……ちようどお座敷がございます。」

「待て、」

と云つたが、遣手の劍幕に七分の恐怖で、煙草入を取つて、ヤツと立つと……まだ酔つ
ている片膝がぐたりとのめる。

「蠟燭はどうしたんだ。」

「何も御會計と御相談さ。」と、ずつきり言う。

……彼は、苦い顔で立上つて、勿論広くはない廊下、左右の障子へ突懸るようになり、若い衆の背中を睨んで、不服らしくずんずん通つた。

が、部屋へ入ると、廊下を背後にして、長火鉢を前に、客を待つ氣構えの、優しく白い手を、しなやかに鉄瓶の蔓に掛けて、見るとも見ないともなく、ト絵本の読みさしを膝に置いて、膚薄そうな縞縮緬。撫肩の懐手、すらりと襟を透らした、紅の襦袢の袖に片手を包んだ頤深く、清らか耳許すつきりと、湯上りの紅絹の糠袋を皚齒に嚙んだ趣して、頬も白々と差俯向いた、黒縷子冷たき雪なす頸、これが白露かと、一目見ると、後姿でゾツとする。――

「河、原、と書くんだ、河原千平。」

やがて、帳面を持つて出直した時、若いものは、軸で、ちよつと耳を搔いて、へへへ、と笑つた。

「貴客、ほんとの名を聞かして下さいませ。」

犬を料理そんな卓子台の陰ながら、膝に置かれた手は白し、凝と視られた瞳は濃し……

……

思わず情が五体に響いて、その時言った。

「進藤延一……造兵……技師だ。」

七

「こういう事をお話し申した処で、ほんとにはなさりますまい。第一そんな安店に、容色と云い氣質と云い、名も白露で果敢ないが、色の白い、美しい婦が居ると云つては、それからが嘘らしく聞えるでございましょう。」

その上、癡言を吐け、とお叱りを受けようと思ひますのは、娼妓でいて、まるで、その婦が素地の処女らしいのでございませう。ええ、他の仁にはまずとにか、私だけにはまったくでございませう。

なお怪しいでございませう……分けて、旦那方は御職掌で、人一倍、疑り深くいらつしやいますから。」――

一言ずつ、呼吸を吐くと、骨だらけな胸がびくびく動く、そこへ節くれだつた、爪の黒い掌をがばと当てて、上下に、調子を取つて、声を揉出す。

佐内坂の崖下、大溝通りを折込んだ細路地の裏長屋、棟割で四軒だちの尖端で……崖うらの畝坂が引窓から雪顔れ込みそうな掘立一室。何にも無い、畳の摺剥けたのがじめじめと、蒸れ湿つたその斑が、陰と明るみに、黄色に鼠に、雑多の虫虻の湧いて出た形に見える。葉鉄落しの灰の濡れた箱火鉢の縁に、じりじりと燃える陰気な蠟燭を、舌のようになめらかして、しょんぼりと蒼ざめた、髪の毛の蓬なのが、この小屋の……ぬしと言いたい、墓から出た状の進藤延一。

がつしとまた胸を絞つて、

「であります、余りお疑い深いのも罪なものでございます。」

と、もの言う都度、肩から暗くなつて、蠟燭の灯に目ばかりが希代に光る。

「疑うのが職業だつて、そんな、お前、狐の性じやあるまいし、第一、僕はそのね、何も本職というわけじやないんだよ。」

となぜか弱い音を吹いた……差向いをずり下つて、割膝で畏つた半纏着の欣八刑事、風受けの可い勢に乗じて、土蜘蛛の穴へ深入りに及んだ列卒の形で、肩ばかり聳やかして弱身を見せじと、擬勢は示すが、川柳に曰く、鍔塗りの形に動く雲の峰で、蠟燭の影に蟠る魔物の目から、身体を遮りたそうに、下塗の本体、しきりに手を振る。……

「可いかね、ちよいと岡引ッて、身軽な、小意気な処を勤めるんだ。このお前、しつきりなし火沙汰の中さ。お前、焼跡で引火奴を捜すような、変な事をするから、一つ素引いてみたまでのもんさね。直ぐにも打縛りでもするように、お前、真剣になって、明白を立てる立てるッて言わあ。勿論、何だ、御用だなんて威かしたには威しましたさ、そりや発奮というもんだ。

明白を立てます立てますッて、ここまで連れて来るから、途中で小用も出来ずさね、早い話が。

隣家は空屋だと云うし、……」

と、頬被のまま、後を見た、肩を引いて、

「一軒隣は按摩だと云うじゃねえか。取附きの相角がおでん屋だッて、かッと飲んだように一景気附いたと思や、夫婦で夜なしに出て、留守は小児の番をする下性の悪い爺さんだと言わあ。早い話がじゃ、この一棟四軒長屋の真暗な凶体の中に、……」

と鰹を塗って、

「まあ、可やね、お前、別にお前、怪しいたッて、何も、ねえ、まあ、お互に人間に成りはねえんだから、すぐにさようならにしようと思った。だけれど、話の口明が、宿の女

郎だ。おまけに別嬪べっぴんと来たから、早い話が。

でまあ、その何だ、私わっしも素人じゃねえもんだから、」

と目潰めつぶしの灰の気さ。

「一ツ詮索せんさくをして帰ろう、と居坐ったがね、……気にしなさんな。別にお前の身体からだを裏

返しにして、綺麗に洗いだてをしようと言うんじゃねえ。可いから、」

と云う中うちにも、じろりと視みる、そりや光るわ、で鏝を塗って、

「大目に見てやら。ね、早い話が。僕は帰るよ、気にしなさんな。」

「ええ、いや、私てまえの方で、気にしない次第わけには参りません。」

欣八、ぎよつとして、

「そうかね、……はてね。……トオカミ、エミタメはどんなものだ。」と字あざなは孔明、琴を

弾く。

八

「で、その初会の晩などは、見得に技師だつて言いました。が、私てまえはその頃、小石川へ勤

めました鉄砲組でございしますが、

「ああ、造兵かね、私の友達にも四五人居るよ。中の一人は、今夜もお不動様で一所だけ。そうかい、そいつは頼母しいや。」と欣八いささか色を直す。

「見なさいます通りで、我ながら早やかように頼母しくな過ぎます。もつとも、車夫の看板を引抜いて、肩で暖簾を分けながら、遊ぶぜ、なぞと酔った晩は、そりや威勢が可うがした。」

と投首しつつ、また吐息。じつと灯を瞻つたが、

「ところで、肝心のその燃えさしの蠟燭の事でございします。

嘘か、真かは分りません。かねて、牛鍋のじわじわ酒に、夥間の友だちが話しました事を、——その大木戸向うで、蠟燭の香を、芬と酔爛れた、ここへ、その脳へ差込まれましたために、ふと好事な心が、火取虫といった形で、熱く羽ばたきをしたのでございします。

内には柔しい女房もございました。別に不足というでもなし、……宿へ入ったというものは、ただ蠟燭の事ばかり。でございしますから、圧附けに、勝手な婦を取持たれました時は、馬鹿々々しいと思いましたが、因果とその婦の美しき。

成程、桔梗屋の白露か、玉の露でも可い位。

けれども、楼なり、場所柄なり、……余り綺麗なので、初手は物凄かったのでござい
ます。がいかにも、その病気があるために、——この容色、三絃もちよつと響く腕で——
蹴ころ同然な掃溜へ落ちていると分りますと、一夜妻のこの美しいのが……と思う嬉
しさに、……今の身で、恥も外聞もございませぬ。筋も骨もとろとろと蕩けそうになりま
した。……

枕頭の行燈の影で、ええ、その婦が、二階廻しの手にも投遣らないで、寝巻に着
換えました私の結城木綿か何か、ごつごつしたのを、絹物のように優しく扱って、袖
畳にしていたのでございます。

部屋着の腰の巻帯には、破れた行燈の穴の影も、蝶々のように見えて、ぞくりとする肩
を小夜具で包んで、恍惚と視めていますと、畳んだ袖を、一つ、スーと扱いた時、袂の
端で、指尖を留めましたがな。

横顔がほんのりと、濡れたような目に、柔かな眉が見えて、
貴方は御存じね——」

延一は続けさまに三つばかり、しやがれた咳して、

「私てまえに、残らず自分の事を知つていて来たのだろうと申しまして、——頂かして下さいましな、手を入れますよ、大事ごんせんごんせんか——」

と念を押して、その袂から、抜いて取つたのが、右の蠟燭でございませう。」

「へい、」と欣八は這身はいみに乗出す。

「が、その美人。で、玉で刻んだ独鈷とっこか何ぞ、尊いものを持ったように見えました。

遣手てまえも心得た、成りだけは隠す事、それと言わずに逢わせた、とこてまえう私てまえは思う。……

——どちらの御蠟でござんすの——

また、そう訊くのがお極きまりだと申します。……三度のもの、湯水より、蠟燭でさえあれば、と云う中うちにも、その婦おんなは、新あらのより、燃えさしの、その燃えさしの香においが、何とも言えず快い。

その燃えさしもございませう。

一度、神仏の前に供えたのだ、と持つ手もわななく、体みを震わして喜ぶんだ、とかねて聞いておりましたものでございませうから、その晩は、友達と銀座の松喜で牛肉をしたたか遣りました、その口で、

——水天宮様のだ、人形町の——

と申したでございませう。電車の方角で、フト思い付きました。銀座には地藏様もございませうが、一言で、誰も分るのをと思ひましてな。ええ。……」

とじろじろと四辺あたりみまわをす。

欣八は同じように、きよろきよろと頭を振る。

九

「お聞き下さい。」

と瘦やせた膝を痛そうに、延一は居直つて、

「かねて噂を聞いたから、おいらんの土産にしようと思つて、水天宮様の御蠟の燃えさしを頂いて来たんだよ、と申しますと、端然きちんと居坐いすまを直して、そのふっくりした乳房へ響くまで、身に染みて、鳩尾みずおちへはつと呼吸いきを引いて、

——まあ、嬉しい——

とちゃんと取つて、蠟燭を頂くと、さもその尊さに、生際はえぎわの曇った白い額から、品物は輝いて後光さが射すように思われる、と申すものは、婦おんなの氣の入れ方でございまして。

どうでございましょう。これが直き近所の車夫の看板から、今しがた煙草を吸って、酒粘りの唾を吐いた火の着いていたやつじやございますまいか。

なんぼでも、そうまで真になつて嬉しがられては、灰吹を叩いて、舌を出すわけには参りません。

実は、とその趣を陳べて、堪忍しな、出来心だ。そのかわり、今度は成田までもわざわざ出向くから、と申しますと、婦が莞爾して言うんでございます。

これほどまでに、生命がけで好きなんですから、どここの、どうした蠟燭だか、大概は分ります。一度燃えたのですから、その香で、消えてからどのくらい経ったかが知れますと、伺つた路順で、下谷だが浅草だが推量が付くんです。唯今下すつたのは、手に取ると、すぐに直き近い処だとは思いました、……では、大宗寺様のかと存じましたが、召上つた煙草の粉が附着いていますし、御縁日ではなし、かたがた悪戯に、お欺ぎだとは知つたんですが、お初会の方に、お怨みを言うのも、我儘と存じて遠慮しました。今度ツからは、たとい私をお誑しでも、蠟燭の嘘を仰有るとほんとうに怨みますよ、と優しい含声で、ひそひそと申すんで。

もう、實際嘘は吐くまい、と思つたくらいでございます。

部屋着を脱ぐと、緋ひの襦じゆ袷ばんで、素足がちらりとすると、ふツ、と行燈を消しました。
 ……底あたたかみに温あたたかみ味あたたかみを持ったヒヤリとするのが、酒の湧わく胸むねへ、今にもいい薫かおりで颯さつと絡まつわるかと思うと、そうでないので。――

カタカタと暗がりたんすで箆ひき笥だしの抽斗ひきだしを開けましたがな。

――水天宮様のお目に掛けましょう――

そう云つて、柔らかい膝きぬずの衣摺きぬずれの音がしますと、燐寸マツチを※と摺すつた。「

「はあ、」

と欣八は、その※とした……瞬ちゆんきする。

「で、朱塗しゆぬの行燈ぎやうとうの台たいへ、蠟燭ろうそくを一挺ちやうとう、燃えさしのに火ともを点して立てたのでございます。」
 と熟じつと瞻みまもる、とここの蠟燭ろうそくが真直まっすぐに、細ほつそりと灯あかりが据すわつた。

「寂然しんぜんとしておりますので、尋常ただのじやない、と何となくその暗い灯あかりに、白い影かげがあるらしく見えました。」

これは、下谷げやの、これは虎の門とらのもんの、飛とんで雑司ぞうしヶ谷がやのだ、いや、つい大木戸おほきどのだと申し、油皿あぶらひらの中なかまで、十四五挺しちごとう、一ツずつ消しちや頂あたまいて、それで一ツずつ、生なま々なまとした香においの、煙けむり……と申して不思議ふしぎにな、一つ色ではございません。稻荷いなりさま様さまのは狐色きつねいろと申すで

はないけれども、大黒天のは黒く立ちます……気がいたすのでございます。少し茶色のだの、薄黄色だの、曇った浅黄がございましたり。

その燃えさしの香の立つ処を、睫毛を濃く、眉を開いて、目を恍惚と、何と、香を散らすまい、煙を乱すまいとするように、掌で蔽つて余さず嗅ぐ。

これが葉なら、身体中、一筋ずつ黒髪の尖まで、血と一所に遍く膚を繞つた、と思つて、くすぶりもせずになお冴える、その白い二の腕を、緋の袖で包みもせずに、……」
聞く欣八は変な顔色。

「時に……」

と延一は、ギクリと胸を折つて、抱えた腕なりに我が膝に突伏して、かツかツと咳をした。

十

その脛に朱を灌ぐ……汗の流るる額を拭つて、

「……時に、その枕頭の行燈に、一挺消さない蠟燭があつて、寂然と間を照してお

りますんでな。

—— あれは ——

—— 水天宮様のお蠟です ——

と二つ並んだその顔が申すんでございます。灯の影には何が映るとお思いなさる、……
気になること夥しい。

—— 消さないかい ——

—— 堪忍して ——

是非と言えば、さめぎめと、名の白露が姿を散らして消えるばかりに泣きますが。推量
して下さいまし、愛想尽しと思うがままよ、鬼だか蛇だか知らない男と一つ処……せめ
て、神 仏の前で輝いた、あの、光一ツ暗に無うては恐怖くて死んでしまうのですもの。
もし、気になったら、貴方ばかり目をお瞑りなさいまし。——と自分は水晶のような黒目
がちのを、すつきり睜つて、——昼さえ遊ぶ人がござんすよ、と云う。

可し、神仏もあれば、夫婦もある。蠟燭が何の、と思う。その蠟燭が滑々と手に触る、
……扱帯の下に五六本、襟の裏にも、乳の下にも、幾本となく忍ばしてあるので、ぎよつ
としました。残らず、一度は神仏の目の前で燃え輝いたのでございましょう、……中には、

口にするのも憚る、荒神も少くはありません。

ばかりでない。果ては、その中から、別に、綺麗な絵の蠟燭を一挺抜くと、それへ火を移して、銀簪の耳に透す。まずどうするとお思いなさる、……後で聞くとこの蠟燭の絵は、その婦が、隙さえあれば、自分で割青のように縫針で彫って、彩色をするんだそう。それは見事でございます。

また髪は、何十度逢つても、姿こそ服装こそ変りませんが、いつも人柄に似合わない、あの、仰向けに結んで、緋や、浅黄や、絞の鹿の子の手絡を組んで、黒髪で巻いた芍薬の苔のように、真中へ簪をぐいと挿す、何転進とか申すのにはかり結う。

何と絵蠟燭を燃したのを、簪で、その鬘の真中へすくりと立てて、烏羽玉の黒髪に、ひらひらと篝火のひらめくなり、右にもなれば左にもなる、寝返りもするのでございます。

——こうして可愛がつて下さいますなら、私や死んでも本望です——

とこれで見ると、白露のその美しさと云つてはない。が、いかな事にも、心を鬼に、爪を鷲に、狼の牙を嚙鳴らしても、森で丑の時参詣なればまだしも、あらたかな拜殿で、巫女の美女を虐殺しにするようで、笑靨に指も触れないで、冷汗を流しました。

……
それから悩乱。

因果と思切れません……が、

——まあ嬉しい——

と云う、あの、容子ようすばかりも、見て生命いのちが続けたさに、実際、成田へも中山へも、池上、堀の内は申すに及ばず。——根も精も続く限り、蠟燭の燃えさしを持つては通い、持つては通い、身も裂き、骨も削りました。

昏くらんだ目は、昼遊ひるあそびびにさえ、その燈ともに眩まぶしいので。

手足の指を我と折つて、頭髪ずはつを掴つかんで身悶みもだえしても、婦おんなは寝るのに蠟燭を消しません。度かさなるに従つて、数を増し、燈ひを殖ふして、部屋中、三十九本まで、一度に、神々の名を輝かして、そして、黒髪に絵蠟燭の、五色の簪かんざしを燃して寝る。

その媚なまめかしさと申すものは、暖かに流れる蠟燭より前に、見るものの身が泥になつて、熔とけるのでございます。忘れません。

因果いんぐうと業ごうと、早はややこの体ていになりましたれば、揚あげ代だいどころか、宿までは、杖すに縫すがつても呼吸いきが切れるのでございましょう。所詮しよせんの事に、今も、婦おんなに遣やわします気で、近い処の縁

日だけ、蠟燭の燃えさしを御合力に預ります。すなわちこれでございます。」

と袂たもとを探ったのは、ここに灯ひともしたのは別に、先刻さつきの二七のそれであった。

犬のしきりに吠ほゆる時——

「で、さてこれを何にいたすとお思いなさいませ。懺悔ざんげだ、お目に掛けるものがある。」

「大変だ、大変だ。何だつて和尚さん、奴もそれまでになったんだ。気の毒だと思つてその女がくれたんだらうね、緋ひの長襦袢ながじゆばんをどうだらう、押入の中へ人形のように坐らせた。胴へは何を入れたかね、手も足もないんでさ。顔がと云うと、やがて人ぐらいの大きさに、何十挺だか蠟燭を固めて、つるりとやつぱり蠟を塗つて、細工をしたんで。そら、燃えさしの処が上になつてゐるから、ぼちぼち黒く、女鳴神おんななるかみツて頭でさ。色は白いよ、凄すこいよ、お前さん、蠟だもの。」

私わつしあ反そつたねえ、押入の中で、ぼうとして見えた時は、——それをね、しなしなと引出して、膝へ横抱きにする……とどうです。

欠火鉢かけひぼちからもぎ取つて、その散髪さんぎりみたいな、蠟燭の心へ、火を移す、ちろちろと燃えるじゃねえかね。

ト舌は赤いよ、口に締りをなくして、奴め、ニヤニヤとしながら、また一挺、もう一本、

だんだんと火を移すと、幾筋も、幾筋も、ひよろひよると燃えるのが、搦み合つて、空へ立つ、と火尖が伸びる……こうなると可恐しい、長い髪の毛の真赤なのを見るようですぜ。見る見る、お前さん、人前も構う事か、長襦袢の肩を両脇へ巻込んで、汝が着るように、胸にも脛にも搦みつけたわ、裾がずるずると畳へ曳く。

自然とほてりがうつるんだってね、火の燃える蠟燭は、女のぬくみだツさ、奴が言う、……可うがすかい。

頬辺を窪ますばかり、歯を吸込んで附着けるんだ、串戯じゃねえ。

ややしばらく、魂が遠くなつたように、静としていると思うと、襦袢の緋が颯と冴えて、揺れて、靡いて、蠟に紅い影が透つて、口惜いか、悲いか、可哀なんだか、ちらちらと白露を散らして泣く、そら、とろとろと煮えるんだね。嗅ぐさ、お前さん、べろべろと舐める。目から蠟燭の涙を垂らして、鼻へ伝わらせて、口へ垂らすと、せいせい肩で呼吸をする内に、ぶるぶると五体を震わす、と思うとね、横倒れになつたんだ。さあ、七顛八倒、で沼みたいな六畳どろどろの部屋を転摺り廻る……炎が搦んで、青蜥蜴の腕打つようだ。

私あ夢中で逃出した。——突然見附へ駈着けて、火の見へ駈上ろうと思つたがね、

まだ田町から火事も出ずさ。

何しろ馬鹿だね、馬鹿も通越しているんだね。」

お不動様の御堂を敲いて、夜中にこの話をした、下塗の欣八が、

「だが、いい女らしいね。」

と、後へ附加えた了簡が悪かった。

「欣八、気を付けねえ。」

「顔色が変わだぜ。」

友達が注意するのを、アハハと笑消して、

「女がボーッと来た、下町ア火事だい。」と威勢よく云っていた。が、ものの三月と経たぬ中にこのべらぼう、たった一人の女房の、寝顔の白い、緋手絡の円鬘に、蠟燭を突刺して、じりじりと燃して火傷をさした、それから発狂した。

但し進藤とは違う。陰気でない。縁日とさえあればどこへでも押掛けて、鍔塗の変な手つきで、来た来たと踊りながら、

「蠟燭をくんねえか。」

怪むべし、その友達が、続いて——また一人。……………

大正二（一九一三）年六月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成6」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年3月21日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十五卷」岩波書店

1940（昭和15）年9月20日発行

入力：門田裕志

校正：高柳典子

2007年2月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

菟蕪本

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>